

導 入 科 目

時間割コード	774001	開講区分	第2学期
曜日・時間	金曜日・6時限		
開講科目名	神経薬理学	定員	
開講科目名(英)	Neuropharmacology	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室	年次	1年
担当教員	片山泰一、橋本 均、田熊一徹、早田敦子 (大阪校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	神経薬理学		
開講言語	日本語		
授業の目的	薬理学は、生体と化学物質(内因性物質を含む)との相互作用を研究する学問領域であり、薬物治療のみならず、病態の成因を、分子レベルで理解するうえで重要である。神経薬理学では、精神・神経系領域に焦点を絞り、まず、薬物と生体の相互作用とそれに影響を与える因子、神経系作用薬の作用メカニズムおよび生体内標的分子などについての総論を理解する。また、精神・神経系に作用する代表的な薬の治療メカニズムと臨床応用について、最新の研究成果の例も含めて、理解を深めることを目的とする。		
学習目標	本科目を受講終了時には、異なるバックグラウンドを持つ学生が全て「子どものこころの障害」に結びつく以下の基礎知識を他者に説明できる。すなわち、1.生体の機能と化学物質の関連について。2.薬の作用を理解するために必要な生体内情報伝達の基礎について説明できる。3.病気や障害(特に脳に関わるもの)の成因を分子レベルで理解し、他者に説明できる。		
授業計画	<p>(田熊一徹／5回) 薬物の動態、薬物と生体の相互作用、相互作用に影響を与える因子などについての基礎を学び、薬が効くメカニズムについて理解する。また、受容体・トランスポーター・イオンチャンネルなどを介した生体内情報伝達の基礎を学び、薬物の作用点としての重要性を理解する。一方、薬物への耐性と依存についても学ぶ。</p> <p>(橋本 均、早田敦子／5回) 生体アミン(ドパミン・ノルアドレナリン・セロトニンなど)、神経性アミノ酸(グルタミン酸・GABA など)、アセチルコリンや生理活性ペプチド等の薬理作用を理解し、これらの神経系を標的とする、種々の精神・神経疾患治療薬の治療メカニズムならびに臨床応用について学ぶ。</p> <p>(片山泰一／5回) 前10回の講義を踏まえて精神・神経疾患治療薬を神経薬理学的観点から概説すると同時に同疾患治療に関わる最新の知見と病因論との相関について学習する。</p> <p>第1回 (田熊) 薬物の動態</p> <p>第2回 (田熊) 薬物と生体の相互作用</p> <p>第3回 (田熊) 薬物と生体の相互作用に影響を与える因子</p> <p>第4回 (田熊) 生体内情報伝達の基礎</p> <p>第5回 (田熊) 薬物への耐性と依存</p> <p>第6回 (早田) 生体アミン(ドパミン)</p> <p>第7回 (早田) 生体アミン(ノルアドレナリン・セロトニン)</p> <p>第8回 (早田) 生理活性ペプチド</p> <p>第9回 (早田) 神経性アミノ酸</p> <p>第10回 (橋本) アセチルコリン</p> <p>第11回 (片山) 神経薬理学と病因論(総論)</p> <p>第12回 (片山) うつ病の病因論と最近の治療薬</p>		

	第 13 回 (片山) 抗不安薬・抗てんかん薬の歴史と最近の話題
	第 14 回 (片山) 統合失調症発症機構を目指した最近の取り組み
	第 15 回 (片山) 神経変性疾患研究の最前線
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%, 試験またはレポート 50%
コメント	

時間割コード	774002	開講区分	第2学期
曜日・時間	水曜日・5時限		
開講科目名	行動・情動神経科学	定員	
開講科目名(英)	Cognitive Neuroscience of Emotion and Behavior	単位数	2単位
場 所	金沢校講義室、大阪校講義室	年次	1年
担当教員	柴 和弘、三枝理博、堀 修、大黒多希子、堀家慎一(金沢校)、遠山正彌(大阪校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	行動・情動神経科学		
開講言語	日本語		
授業の目的	脳には記憶・学習、感覚・運動、本能・情動・理性及び生体維持機能等に係わる部位が存在し、また、それぞれが連動して制御している。これらの機能はストレス、薬物や物理的障害等の外的要因や老化、遺伝子疾患等の内的要因により、機能異常及び障害を起こす。この講義ではこれらの脳の機能に関する基礎知識並びに、こころのひずみや脳の機能障害について動物を用いて解析する方法を、神経解剖学、分子生物学、神経発生学、画像解析学、動物行動科学を通じて、それらの基礎を習得する。		
学習目標	脳の部位別の働きや仕組みについて他者に説明できる。 脳の神経伝達系の種類と働きについて他者に説明できる。 動物を用いた脳神経化学研究について他者に説明できる。		
授業計画	<p>(柴 和弘／4回) 大脳・小脳・脳幹からなる脳の構造と機能及び働きについて概説する。特に、大脳における感覚、言語、思考、記憶・学習、本能・情動、理性等のかかわり、小脳における運動学習・記憶等のかかわり、脳幹における生命維持中枢としてのかかわりについて学ぶ。また、放射性同位元素を用いた脳神経機能イメージングの基礎を習得する。</p> <p>(未定／2回) ヒト発達障害のうち、特に遺伝的要因が強いとされる自閉症を中心に概説する。ヒト集団遺伝学、基礎医学の立場からの研究を紹介し、自閉症に対する分子遺伝学、神経科学的知見を深める。同時に、自閉症をもたらす遺伝子が、マウス等のモデル動物の“こころ”にどのような影響をもたらすかについての動物行動学的研究を紹介する。</p> <p>(遠山正彌／2回) 情動に関わる神経回路に関して、化学的神経解剖学的手法を用いた回路解析の歴史、およびその意義に関して概説する。脳幹から、辺縁系・視床下部に投射するモノアミン神経とその機能に関して学ぶ。</p> <p>(三枝理博／2回) 睡眠・覚醒の制御機能や摂食行動の制御機構について学び、大脳辺縁系や視床下部・脳幹の機能との関連を理解する。</p> <p>(堀 修／2回) 自律神経に関して概説する。内臓を支配する交感神経系・副交感神経系に関して説明し、内臓感覚が上行し、統括される機構に関して説明する。</p> <p>(大黒多希子／1回) 実験動物学と動物実験学の基礎について学ぶ。特に動物実験を行う場合の法規制と倫理的側面について理解し、科学的にも倫理的にも適切な動物実験の方法について学ぶ。</p> <p>(堀家慎一／2回) ゲノムとエピゲノム、環境因子が複合的に作用し発症する自閉症などの発達障害の発症機序を概説する。環境因子が如何にエピゲノム修飾を介して脳機能に影響をあたえるかについて理解する。</p>		
	第1回 (柴) 大脳の構造と五感、言語、記憶・学習、本能・情動のしくみの概説		
	第2回 (柴) 小脳及び脳幹の役割と神経伝達のしくみの概説		
	第3回 (柴) <i>in vivo</i> イメージングのモダリティとしくみの概要		
	第4回 (柴) 放射性標識分子イメージング剤による脳神経機能の画像化と解析の基礎		
	第5回 (大黒) 動物実験の法規制と倫理		

	第6回 (堀家)ゲノムとエピゲノムの基礎
	第7回 (堀家)環境要因により発症する疾病の発症機序
	第8回 (三枝)すべての行動をささえる「覚醒」の生理と睡眠の概説
	第9回 (三枝)動機づけ行動、特に摂食行動についての概説
	第10回 (堀)自律神経系の基礎
	第11回 (堀)自律神経系による内蔵機能の制御
	第12回 (遠山)情動に関わる神経回路解析
	第13回 (遠山)モノアミン神経とその機能
	第14回 (未定)ヒト自閉症をもたらす遺伝子の概説
	第15回 (未定)自閉症原因遺伝子と神経生理機能／発生／発達等
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席回数が 2/3 以上に達した学生に対して、講義への参加・聴講態度をもとに判断し、一定の基準に達した者に対して、2単位を認定する。
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	774003	開講区分	第1学期
曜日・時間	金曜日・5時限		
開講科目名	臨床遺伝・発達分子生物学	定員	
開講科目名(英)	Clinical Genetics and Developmental Molecular Biology	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室、金沢校講義室、浜松校臨床研究棟2F 213 セミナー室、福井校講義室、	年次	1年
担当教員	松崎伸介、酒井規夫、橋本亮太、三好 耕、眞部孝幸(大阪校)、服部剛志(金沢校)、栃谷史郎(福井校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	臨床遺伝・発達分子生物学		
開講言語	日本語		
授業の目的	<p>子どものこころの病気において脳の発達の障害が生物学的な発症基盤として存在すると考えられているにもかかわらず、その分子生物学的なメカニズムについてはまだまだ知見が少ない。そこで、本講義においては、「遺伝子、DNA、染色体」における科学の進歩といった臨床遺伝学、分子生物学の基礎から研究への応用、最近の知見、を中心に学び、一般に正しく理解されていない「遺伝」を正しく理解すること、及び代表的な精神・神経疾患に対する遺伝学的、分子生物学的手法による病態解明へのアプローチ方法を学び、こころの病気の遺伝学的・分子生物学的側面について理解を深めることを目的とする。</p>		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・分子生物学・遺伝学をベースとした精神疾患・神経疾患(とりわけ発達障がい)研究の論文を読み理解するための知識を修得する。 ・研究課題に対して分子生物学的に・遺伝学的にどのような研究アプローチが可能であるかを思考し、研究デザインの構築を自らが行う能力を修得する。 		
授業計画	<p>本講義においては、上記学習目標を達成するため、以下の講義内容を実施する。</p> <p>第1回 (栃谷) 遺伝学の基礎① 第2回 (栃谷) 遺伝学の基礎②</p> <p>遺伝子、染色体、DNA、RNA などについて復習したうえで、転写、翻訳などの遺伝子発現や遺伝情報の複製、組み換え、修復などの基本的メカニズムを学習する。また、遺伝子変異及びSNP等の遺伝子多型とそれらの表現型などについて理解し、最新の診断技術などについて学習する。</p> <p>第3回 (酒井) 先天異常と遺伝の関係 第4回 (酒井) 遺伝因子と環境因子</p> <p>小児における臨床遺伝的な問題点として、先天異常における成因を遺伝因子と環境因子の両面から理解し、その医療的な対応としての遺伝カウンセリングの意義を理解することを目的とする。第3回、第4回の講義で先天異常の成因、分類、頻度を含めた理解を目指し、第7回の講義では遺伝カウンセリングの概説とともにロールプレイの経験を試みる。</p> <p>第5回 (松崎) 分子生物学・神経発達学の基礎①</p> <p>細胞の構造・機能についての理解を深め、分子生物学的研究で必要となる用語の知識・意味を修得する</p> <p>第6回 (松崎) 分子生物学・神経発達学の基礎②</p> <p>分子生物学的研究で行われる研究手法について、その方法と意味を修得する。講義には実際の学術論文(分子生物学)を用い、学術論文を読み解く能力を修得する。</p> <p>第7回 (酒井) 遺伝カウンセリングの考え方 第3・4回 の項参照</p>		

	<p>第 8 回 (三好) 中枢神経系における1次繊毛の機能</p> <p>1次繊毛は細胞周囲の刺激を感知し細胞体に伝達する事により、発達や恒常性維持に関与する。本講義では、繊毛関連遺伝子の変異が惹起する疾患群、薬理的処置による神経細胞の1次繊毛の伸長、1次繊毛に局在する受容体について概説する。1次繊毛を介したシグナル伝達機構を他者に説明できる事を学生の学習目標とする。</p>
	<p>第 9 回 (松崎) 分子生物学・神経発達学の基礎④</p> <p>参加学生が興味を持つ研究対象に対してどのような分子生物学的研究によるアプローチが可能であるのか否かをディスカッションすることで、自らの研究計画を構築し、研究デザイン能力を修得する。</p>
	<p>第 10 回 (眞部) スプライシング異常からみた精神疾患</p> <p>RNA 制御学の基礎を理解し、その破たんが各種精神疾患及ぼす影響を学ぶ。本講義では、特に多くの異常を呈することが知られているスプライシング制御機構の基本とその異常に焦点を当て、当該領域研究の実際を紹介する。</p>
	<p>第 11 回 (服部) 精神疾患の発症メカニズム DISC1を中心に①</p> <p>第 12 回 (服部) 精神疾患の発症メカニズム DISC1を中心に②</p> <p>統合失調症をはじめとする精神疾患では発症に関連する遺伝子が多数あることが知られている。これらの遺伝子の異常がどのような分子メカニズムで精神疾患を引き起こすかを細胞レベル、実験動物レベルで解析する方法を身につけることを目的とする。</p>
	<p>第 13 回 (松崎) 分子生物学・神経発達学の基礎③</p> <p>実際の研究論文題材としてを用い、どのような研究方法、実験手技を用いて分子生物学的研究が実施されたかを参加学生とディスカッションすることで、研究論文の読み方を学ぶとともに、研究デザイン能力を修得する。</p>
	<p>第 14 回 (橋本) 精神疾患の臨床遺伝学(統合失調症と中間表現型)</p> <p>精神疾患の臨床遺伝学について、中間表現型を用いた研究手法とその意義について概説し、遺伝学と分子生物学のトランスレーショナル研究についての理解を深め、研究デザインの構築を学生が行う能力を習得する</p>
	<p>第 15 回 (橋本) 精神疾患の臨床遺伝学(自閉スペクトラム症)</p> <p>精神疾患の臨床遺伝学に関する研究において、日頃の臨床現場にて患者が持つ疑問や心配を理解し、今後の臨床研究を行う心構えと対応法を習得する</p>
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%, レポート 50%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること

時間割コード	774004	開講区分	第1学期
曜日・時間	月～金曜日(4月6日～4月30日、水曜日を除く)・6時限		
開講科目名	生命倫理学	定員	
開講科目名(英)	Bioethics	単位数	2単位(必修)
場 所	大阪校講義室	年次	1年
担当教員	加藤和人、平井 啓、村上靖彦、霜田 求、山中浩司、楠木重範、馬戸史子、小門 穂(大阪校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	生命倫理学		
開講言語	日本語		
授業の目的	本講義は、臨床医療や医学・生命科学研究において問題となる「倫理」とは何かを理解した上で、医療現場や医学研究の最前線で起こっていることに対して、適切な判断・評価を下し、かつ関係当事者との間で意見交換ないし討論を行うことができる人材を育成することを目的とする。そのために、医療倫理・生命倫理における基本的な原則を確認しつつ、具体的なトピックに即して、それぞれの問題枠組みおよび争点を明示した上で、主要な検討課題を提示し、受講者各自が考える機会を与える。		
学習目標	生命倫理学における基礎知識や事例を踏まえた上で、問題点やその対応方法について、受講生が自ら考え意見を持ち、さらに論理的に他の受講生と議論できる能力を身につけるようになること。		
授業計画	<p>(平井 啓/3回) EBMとQOLと倫理の関係を取り上げ、終末期患者が抱える問題と終末期患者へのケアのあり方について概説する。</p> <p>(村上靖彦/2回) 看護師へのインタビューの現象学的な分析を元に、看護実践について考える。</p> <p>(霜田 求/2回) 生命倫理学の基本原則を確認した上で、脳神経倫理について問題の背景と課題を概説する。</p> <p>(加藤和人/3回) 生命科学研究をめぐる公共政策について、具体的なトピックを手がかりにして概説する。</p> <p>(山中浩司/2回) 医療において使用される技術の社会的側面および生活問題の医療化と診断がもたらす社会的影響について説明する。</p> <p>(楠木重範/1回) 具体的な症例から、子どもの権利・意思決定について議論し、小児がん医療における倫理的課題を概説する。</p> <p>(馬戸史子/1回) チャイルド・ライフ・スペシャリストの理念と実践の概説を通して、こどもの視点を主軸とした心理社会的ケアおよび倫理的課題への対応について考える。</p> <p>(小門穂/1回) 生殖医療技術の現状を概説し、具体的なできごとを手がかりに課題を検討する。</p>		
	第1回 (楠木)小児がん医療における倫理的課題について		
	第2回 (山中)医療技術と社会		
	第3回 (霜田)生命倫理学の基本原則		
	第4回 (平井)EBMとQOL		
	第5回 (村上)看護と生命の現象学①		
	第6回 (加藤)生命倫理と公共政策①		
	第7回 (平井)終末期医療①		
	第8回 (馬戸)小児医療における心理社会的ケアと倫理的課題への対応		
	第9回 (加藤)生命倫理と公共政策②		

	第 10 回 (小門)生殖医療
	第 11 回 (山中)医療化と診断の社会的影響
	第 12 回 (霜田)脳神経倫理
	第 13 回 (平井)終末期医療②
	第 14 回 (村上)看護と生命の現象学②
	第 15 回 (加藤)生命倫理と公共政策③(全体のまとめ)
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%, レポート 50%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること

時間割コード	774005	開講区分	第2学期
曜日・時間	水曜日・6時限		
開講科目名	神経社会環境学	定員	
開講科目名(英)	Socio-Neuro Science	単位数	2単位
場 所	金沢校講義室	年次	1年
担当教員	菊知 充、東田陽博、大井 学、池田尊司、橋本隆紀、戸田重誠、滝澤 昇、熊崎博一、越田理恵、村中達矢、齋藤大輔(金沢校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	神経社会環境学		
開講言語	日本語		
授業の目的	病いと社会とのかかわり、自閉症脳と非自閉症脳の相互作用、人間の社会的行動における合理性/非合理性という社会科学の伝統的テーマなどについて、神経科学を参照しながら社会学、心理学の観点から学際的に接近を試みる。また、ニューロンレベルから脳回路レベルまでの幅広い観点から、人の情報処理に関わるメカニズムについて理解する。		
学習目標	人と社会と環境間の関わりについて学習し、新しい学問領域である神経社会環境学について、自身の意見を持ち、その応用として他者に説明できる。		
授業計画	<p>(池田尊司/2回) ワーキングメモリは、思考と行動の制御に関わる実行機能の一つである。実行機能は、思考と行動の制御を行うプロセスであり、前頭葉の働きと関連することが脳科学研究からわかりつつある。社会やコミュニケーションについて、これらのワーキングメモリが重要な役割を果たしていることが判明している。このワーキングメモリを高める介入研究への期待と限界について理解を深める。</p> <p>(齋藤大輔/2回) 脳機能イメージング研究から社会的情報の認知に関わる脳機能について理解を深め、あわせて広汎性発達障害の社会的情報認知の特異性について理解する。</p> <p>(熊崎博一/2回) 嗅覚は生物学的には重要な感覚器官であるにもかかわらず、その社会的な意義や、自閉スペクトラム症における特異性については、学術的な検討はあまり十分にはなされていない。その理由は、嗅覚の刺激や反応を定量的にコントロールすることが困難であることと、脱感作が生じることなどからも、厳密な研究が困難であったことが挙げられる。この嗅覚特性について理解を深める。</p> <p>(橋本隆紀/1回) 大脳皮質は多様な機能を有する多くの領域から成るが、それぞれの領域は、共通したニューロン種とそのネットワークで構成される。本講義では、大脳皮質のニューロン種について概説し、特にGABA系ニューロンについて、その形態と機能の多様性を説明する。また、認知機能に障害が生じる精神疾患と皮質GABAニューロンの関係を紹介し、精神機能におけるGABA系ニューロンの重要性を理解する。</p> <p>(越田理恵/1回) 発達障害の社会環境とそれに対する行政(母子保健、幼少期、学童期のそれぞれに呼応した、保健事業、保育所/幼児教育、教育)の取り組みを理解する。</p> <p>(菊知 充/2回) 脳の解剖学的構造と、認知機能の関係全般について学ぶ。モノアミンの脳内の役割と精神状態の関係について理解を深め、あわせて広汎性発達障害の社会的情報認知の困難さについて理解する。また、オキシトシンが社会的情報認知に与える影響について、人を対象にした心理学的研究から理解する。</p> <p>(戸田重誠/1回) 意志決定の基本メカニズムを理解し、どのように神経伝達物質が関与するか、精神疾患ではどのように意思決定機序が障害されるのかを理解する。</p> <p>(滝澤 昇/1回) 2次障害とは主障害が日常生活を送る過程で別個の症状に波及し出現するものであり、発達障害の場合には思春期に時に激しい症状で発現する。症例を通して理解する。</p> <p>(東田陽博/1回) 社会脳に潤滑油のように作用しているオキシトシンの生理機能について、他人の関心が高まる事を知る。オキシトシン分泌低下を生じるCD38の遺伝子多型から自閉症発症人の道すじを理解する。</p> <p>(大井 学/1回) 過去30年の自閉症発現率急上昇の背景および家庭や雇用の場における対人関係と自閉症との関係について探る。</p> <p>(村中達矢/1回) 自閉症者や健常者が相手の気持ちを理解する認識過程の実態について、認識論・科学哲学における類推・推測・常識などに関する理論を踏まえて検討する。</p>		

	第1回(池田)ワーキングメモリの概念とその発達
	第2回(池田)ワーキングメモリと社会性
	第3回(齋藤)社会性と脳機能イメージング研究(暫定調整中)
	第4回(齋藤)脳機能イメージングにみる自閉症(暫定調整中)
	第5回(熊崎)自閉スペクトラム症と感覚特性
	第6回(橋本)大脳皮質GABA系ニューロンと認知機能
	第7回(越田)発達障害の社会環境と行政
	第8回(菊知)社会的情報処理と脳
	第9回(戸田)意思決定の脳内機序
	第10回(滝澤)発達障害の2次障害
	第11回(東田)オキシトシンと神経性行動
	第12回(熊崎)自閉スペクトラム症と嗅覚特性
	第13回(大井)社会問題としての自閉症
	第14回(菊知)オキシトシンと脳内の社会的情報処理の関係
	第15回(村中)自閉症の哲学
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席回数が 2/3 以上に達した学生に対して、講義への参加・聴講態度や理解度・課題提出状況などをもとに総合的に判断し、一定の基準に達したものに対して、2単位を認定する。
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	774006	開講区分	第1学期
曜日・時間	火曜日・5時限		
開講科目名	小児発達医学	定員	
開講科目名(英)	Developmental Pediatrics	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室、福井校講義室	年次	1年
担当教員	谷池雅子、大藪恵一、毛利育子、和田和子、下野九理子、佐藤拓代、加藤久美、富永康仁、楠木重範(大阪校)、友田明美(福井校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	小児発達医学		
開講言語	日本語		
授業の目的	医学系以外の学生に対しては、「子どものこころの発達とその障害」について理解する上で最低限必要な医学(小児科)の基礎知識を教示すると同時に、医学系の学生には、発達に影響を与える諸病態、また個々の発達障害の診断と治療について小児科学的視点から概説することを目的とする。		
学習目標	正常発達を理解するとともに、子どもに関わる専門職が知っているべき疾患について学習し、発達を促すためにできる医療的介入についての知識を習得する。		
授業計画	<p>(谷池雅子/3回) 「小児発達医学」が対象とする学問領域について概説し、子どもに関わる専門職が 知っておくべき感染症の知識を伝える。 発達の異常を知るためには不可欠な、正常な小児の精神運動発達についての知識を概説する。 発育や発達の異常につながる遺伝性・環境性の要因について概説すると同時に、発達障害としての症状を示すことがあり鑑別が必要な神経変性疾患について述べる。</p> <p>(大藪恵一/1回) 小児の正常な身体発育と、小児の内分泌・代謝系の発達とそれがこころの発達に及ぼす影響について特に思春期に重点をおいて概説する。</p> <p>(和田和子/1回) 子どものこころの発達に関わる専門職が最低知っておくべき新生児医学の知識について概説する。</p> <p>(加藤久美/2回) 小児の発達に良好な睡眠は欠かせないものである。小児期に発症する睡眠関連疾患について概説する。さらに発達障害児に高頻度に合併する睡眠異常について述べる。</p> <p>(佐藤拓代/1回) 現在の日本において子どものこころの専門職が知っておくべき必須の項目である虐待について、その取り組みの歴史や現状、課題について長年支援に関係してきた立場から概説する。</p> <p>(友田明美/1回) 虐待を含めた小児期の非常な逆境が、子どもの脳の発達にどのような影響を及ぼすのかについて最新の画像解析技術を用いて述べる。</p> <p>(富永康仁/1回) 子どものこころのケアに関わる支援職が知っておくべき、(てんかん以外の)小児の神経疾患・筋疾患について概説する。</p> <p>(楠木重範/1回) 深刻な疾患は子どものこころにどのような影響を与えるのであろうか？小児期悪性腫瘍と戦う子どもたちをテーマとして、治療中のサポート、サバイバーが抱える問題、ならびに看取りの医療について概説する。</p> <p>(毛利育子/2回) 自閉症スペクトラム障害、注意欠陥/多動性障害、学習障害等のいわゆる発達障害について、神経科学的なエビデンスを紹介し、医療的介入の可能性を概説する。</p> <p>(下野九理子/2回) 小児神経疾患の診断法と治療法について概説し、とりわけ、発達障害の合併症として非常に重要なてんかんについて診断と治療法について述べる。</p>		
	第1回 (谷池)小児発達医学概論と感染症		
	第2回 (谷池)小児の正常発達		
	第3回 (大藪)小児の成長・思春期と内分泌疾患		

	第4回 (和田) 新生児概論
	第5回 (谷池) 小児の発達の異常とその原因
	第6回 (友田) 小児期の環境が脳に与える影響について
	第7回 (佐藤) 子ども虐待
	第8回 (加藤) 小児の睡眠の基礎と発達との関連
	第9回 (楠木) 小児悪性腫瘍患者の抱えるこころの問題
	第10回 (毛利) 発達障害の神経科学的基礎
	第11回 (毛利) 発達障害に対する医療的介入
	第12回 (富永) 小児の神経(筋)疾患
	第13回 (加藤) 小児の睡眠関連疾患と発達障害児の睡眠障害
	第14回 (下野) てんかんの基礎と診断
	第15回 (下野) てんかんの治療
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%(欠席者のレポート提出は指定されない場合は2週間とする)、レポート 50%
コメント	・母子保健・教育福祉論と難病の子どもについてのトピックや、児童精神医学において発達障害についてのトピックが重複する可能性があるが、小児科医としての視点から講義を行う。 ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること

コード	774007	開講区分	第2学期
曜日・時間	火曜日・6時限		
開講科目名	児童精神医学	定員	10名程度
開講科目名(英)	Child and Adolescent Psychiatry	単位数	2単位
場 所	浜松校臨床研究棟2階 213 セミナー室	年次	1年
担当教員	高貝 就、杉山登志郎、土屋賢治、濱田恵(浜松校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	児童精神医学		
開講言語	日本語		
授業の目的	<p>子どものこころの発達とその障害について必要な知識を学ぶ。子どものこころの問題については小児科医、精神科医、心理士、看護、行政など様々な分野の専門家が連携しながら対応している。職種間で適切な連携を行なうためには、お互いが子どものこころの発達、障害、疾病について十分に理解し共通認識をもつことが必須である。近年、子どものこころの医療は疾病分類、治療を含めて格段の進歩をしている。ここでは子どもに関する臨床的な知識を重点的に学び、さらに最新の診断学や臨床研究について紹介する。</p>		
学習目標	<p>①児童の主要な精神疾患の概要を説明できる。 ②最新の診断法と治療法を理解する。 ③医療支援のために必要となる職種間連携の枠組みを把握する。</p>		
授業計画	<p>(高貝 就/11回) 児童・青年期精神医学について概説し、子どもの正常な精神運動発達について概説するとともに、その障害と原因について精神医学的観点から講義する。さらに、発達障害とおよび心身症について詳細に解説する。また思春期に発症する精神疾患であるうつ病と統合失調症および摂食障害について講義する。また、全体を総括するとともに、連合小児発達学研究科による発達障害に関する研究成果を紹介する。</p> <p>(杉山登志郎/2回) 子ども虐待について児童精神科医としての観点から詳細に解説する。</p> <p>(濱田恵/1回) 子どもの発達・知能の評価法について概説する。</p> <p>(土屋賢治/1回) 今日の自閉症研究において標準的な診断法である自閉症診断面接(ADI-R)について、診断の実際を講義するとともに、他の診断法との関連について概説する。</p>		
	第1回 (高貝)児童青年期精神医学総論		
	第2回 (高貝)子どもの心身の発達		
	第3回 (濱田)発達検査、知能検査		
	第4回 (高貝)発達障害総論		
	第5回 (高貝)自閉症スペクトラム障害(1)		
	第6回 (高貝)自閉症スペクトラム障害(2)		
	第7回 (高貝)注意欠陥・多動性障害、学習障害ほか		
	第8回 (高貝)発達障害への治療と教育		
	第9回 (杉山)子ども虐待(1)		
	第10回 (杉山)子ども虐待(2)		
	第11回 (高貝)小児の心身症		
	第12回 (土屋)自閉症スペクトラム障害の標準的診断法		
	第13回 (高貝)摂食障害		

	第 14 回 (高貝)うつ病・統合失調症
	第 15 回 (高貝)総括
授業外における学習	<ul style="list-style-type: none"> ・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。 ・事前に下欄に記した参考書を読んでおくことが望ましい。 ・毎回欠席者に対するレポート課題を提示する。出席者もその課題に沿って復習すること。 ・担当教員より、期限の指定があった場合を除き、当該講義日から2週間以内に提出すること。
教科書・参考書等	<p>各講義において資料を配布する。</p> <p>「発達障害の子どもたち」(杉山登志郎、講談社現代新書)、「発達障害のいま」(杉山登志郎、講談社現代新書)、「子どもの精神医学ハンドブック」(清水将之著、日本評論社)、「子どもの広汎性発達障害家族応援ブック」(高貝就、法研)</p>
成績評価	出席 50%、試験 50%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・受講にあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	774008	開講区分	第1学期
曜日・時間	木曜日・5時限 (5/12)、6時限 (4/28～8/4)		
開講科目名	疫学統計学	定員	
開講科目名(英)	Epidemiology and Biostatistics	単位数	2単位
場 所	浜松校臨床研究棟2階 213 セミナー室	年次	1年
担当教員	武井教使、土屋賢治、高貝就、西村倫子(浜松校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	疫学統計学		
開講言語	日本語		
授業の目的	<p>ヒトの行動を研究対象とする場合、行動のどの側面に注目するか、それをどのように測定するか、どんな対象者を選ぶか、測定値はどんな科学的事実・仮説を反映しているかについて、研究を行う前に十分な熟慮が求められる。その熟慮を行うためには、体系だった思考が欠かせないが、ここに疫学的知識が大きな役割を果たす。疫学が「研究技術」を体系的に提供する学問体系だからである。本科目では、研究計画の立案に有用な知識の提供を行いつつ、実際に取り組む研究テーマが個々の学生のなかで形になるよう配慮し、疫学総論、研究技術論から統計学の各論に至るまで、順次講義を進める。</p>		
学習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英文論文を渉猟して、研究計画立案に必要な情報を収集することができる。 2. 研究の流れ(仮説設定、対象者・測定方法・解析方法の選択)をデザインし、プロトコールにまとめることができる。 3. 疫学における重要コンセプトを説明できる。 4. 基本的なデータ解析法の概要を説明でき、解析から得られた結果を正しく解釈できる。 		
授業計画	<p>(武井教使／6回) 疫学、統計学について概説するとともに、疫学、統計学の知識が個々の研究にどのようなつながるのかについて概説し、また総合的な議論を行う。</p> <p>(土屋賢治／5回) 個々の研究を進めるうえで欠かせない情報収集や説得・論文執筆などの「研究技術論」について概説する。また、疫学的研究手法を紹介する。</p> <p>(高貝 就／1回) 研究技術論習得の総まとめとして、英文論文の読み方を紹介する。</p> <p>(西村倫子／3回) 個々の研究におけるデータ解析に不可欠な知識と手法を、主に統計学の立場から紹介する。</p> <p>第1回 概論、疫学 overview ～武井</p> <p>第2回 研究技術論 1: Information source ～土屋</p> <p>第3回 研究技術論 2: Evidence and inference ～土屋</p> <p>第4回 研究技術論 3: Appreciation of research paper ～高貝</p> <p>第5回 疫学における重要コンセプト: Prevalence, rate ～武井</p> <p>第6回 疫学における重要コンセプト: Study population and sampling ～武井</p> <p>第7回 疫学における重要コンセプト: Association and causal effect ～武井</p> <p>第8回 疫学における重要コンセプト: Chance, bias and confounding ～武井</p> <p>第9回 疫学研究デザイン論: Overview of study design, and cross-sectional and ecological study design ～土屋</p> <p>第10回 疫学研究デザイン論: Case-control and longitudinal study design ～土屋</p> <p>第11回 疫学研究デザイン論: Longitudinal study design including clinical trials ～土屋</p> <p>第12回 統計学における重要コンセプト、および疫学におけるその利用 ～西村</p>		

	第 13 回 統計学的解析概論・各論 ～西村
	第 14 回 統計学的解析のトレンド ～西村
	第 15 回 研究計画を議論する ～武井
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	以下の書籍は、購入は必須ではないが、意欲のある学生に通読が勧められる。 Rothman, K.J. Epidemiology: An Introduction, 2nd edition. Oxford University Press, 2012. Hennekens, C.H., Buring, J.E. Epidemiology in Medicine. Little, Brown & Co., 1987. Gordis, L. Epidemiology, 5th edition. Elsevier, 2013. (邦訳版「疫学」があるが、旧版の翻訳であるうえ、重要な用語を英語で理解することを目指した本科目の目的にそぐわないため、原版に当たることが望ましい。) なお、情報源としては古いですが、世界的に広く読み継がれてきた優れた教科書を以下で一覧できる。 (http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC1060557/pdf/jepicomh00180-0002.pdf)
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・日本の疫学・統計学領域の用語はよく統一されていない。したがって、本科目では、重要な用語はすべて英語(原語)を用いることとしている。 ・2年次に開講の疫学統計学演習を選択するためには、本科目の履修が望ましい。
欠席課題レポートの提出期限	担当教員より、期限の指定があった場合を除き、当該講義日から2週間以内に提出すること。

時間割コード	774009	開講区分	第2学期
曜日・時間	木曜日・5時限 (10/13~10/27、11/17~11/24、12/8~12/22、1/12~1/26) ・6時限 (10/6、11/10、12/1、1/5)		
開講科目名	運動生体管理学	定員	
開講科目名(英)	Human Movement and Health	単位数	2単位
場 所	金沢校講義室	年次	1年
担当教員	横山 茂、堀 修、吉川弘明、堀家慎一、東田陽博、吉原 亨(金沢校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	運動生体管理学		
開講言語	日本語		
授業の目的	運動、姿勢の制御機構について多面的に学習する。中枢神経系運動野、錐体路、錐体外路など運動制御に関わる神経領域、伝導路の解剖学的基礎を習得するとともに、神経・筋興奮、シナプス伝達の分子・細胞機構を学ぶ。その上で、姿勢制御、運動制御の生理学的機構、両者の協調運動への関わりについて学ぶ。さらに、小児における運動系の発達とその障害を伴う疾患について知り、協調運動障害の理解を深める。		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・末梢、中枢の運動機能をつかさどる神経系の機能と構造を他者に説明できる。 ・末梢、中枢の運動機能をつかさどる機能分子の性状と性質を説明できる。 ・末梢、中枢の運動機能異常をきたす代表的な疾患を挙げ、その病態を説明できる。 ・姿勢制御と運動の制御、および両者の協調運動への関与について説明できる。 ・神経発達障害をきたすゲノム異常を挙げ、発症機序を説明できる。 ・動物実験モデルを用いた運動障害の研究手法を説明し、実験データについて論じることができる。 		
授業計画	<p>(堀 修/3回) 神経細胞や筋細胞と末梢、中枢の運動機能をつかさどる神経系の機能と構造について、解剖学的基礎知識を学ぶ。</p> <p>(横山 茂/5回) 神経細胞と筋細胞の機能分子を理解し、神経興奮の伝導、神経から筋への情報伝達の生理学的基礎知識を習得する。姿勢制御と運動の制御について学ぶとともに、両者の協調運動への関与について学ぶ。</p> <p>(吉川弘明/2回) 中枢神経系、末梢神経系・筋の疾患を理解する上で、個体発生から発達、そして加齢による脳機能の状態を統合的に理解することは、重要な視点を与えてくれる。運動機能に影響を及ぼす中枢神経系および末梢神経系・筋疾患の中からいくつかの例をあげ、その病態生理をヒトの生活歴の中から理解することを目標とする。</p> <p>(堀家慎一/3回) 繰り返し行動や特徴ある運動障害を伴うなどの、神経発達障害を生じるゲノム異常を知るとともに、自閉症を伴うレット症候群の発症機序について詳しく知る。</p> <p>(東田陽博/1回) 自閉症に特徴的な繰り返し行動、社会性障害を知り、発達障害(自閉症)の全体像の中から協調運動障害を理解する。</p> <p>(吉原 亨/1回) 動物実験モデルを用いた運動障害の研究手法を学ぶ。</p> <hr/> <p>第1回 (堀)末梢運動器と脊髄の解剖</p> <p>第2回 (堀)錐体路の解剖</p> <p>第3回 (堀)中枢運動野と協調運動制御の解剖</p> <p>第4回 (横山)神経・筋の興奮伝達の生理学①</p> <p>第5回 (横山)神経・筋の興奮伝達の生理学②</p> <p>第6回 (横山)脳神経組織の形成と発達</p> <p>第7回 (横山)姿勢協調運動の生理学①</p>		

	第 8 回 (吉川) 疾病をとおして見た中枢神経系の病態生理学
	第 9 回 (吉川) 疾病をとおして見た末梢神経系・筋の病態生理学
	第 10 回 (横山) 姿勢協調運動の生理学②
	第 11 回 (堀家) 神経発達障害におけるゲノム異常
	第 12 回 (堀家) 自閉症とエピゲノム
	第 13 回 (堀家) レット症候群
	第 14 回 (東田) ディスレクシアとトゥレット症候群
	第 15 回 (吉原) 実験動物を用いた運動障害の研究方法
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	774010	開講区分	第2学期
曜日・時間	月曜日・6時限		
開講科目名	機能画像解析学	定員	
開講科目名(英)	Functional Neuroimaging	単位数	2単位
場 所	福井校講義室、大阪校講義室、金沢校講義室、浜松校臨床研究棟2F 213 セミナー室、千葉校講義室	年次	1年
担当教員	小坂浩隆、安倍 博、齋藤大輔、島田浩二、岡本悠子、岡沢秀彦、清野 泰(福井校)、佐藤真、岡 雄一郎、畑澤 順、下野九理子(大阪校)、菊知 充、北村陽二(金沢校)、尾内康臣(浜松校)、平野好幸(千葉校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	機能画像解析学		
開講言語	日本語		
授業の目的	非侵襲的に脳活動を調べる fMRI や MEG 等の機能イメージング法が、脳機能を解明する強力なツールとして用いられている。この手法は、生きている脳内の生理学的な機能を様々な方法で測定し、可視化(画像化)するもので、得られたデータを基に心理・認知活動において、脳内の各部位がどのような機能・関連性を担っているのかを調査する。特定の疾患患者と健常者の脳活動との比較により、脳の病気の診断にも用いられ、その要因を探る事で、治療・予防などに応用する事が出来る。 この講義を通じて、脳機能画像データが、どのような原理で得られ、何を計測しているのか、その手法の限界等への理解を深めることを目的とする。		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・脳機能解析の基礎として、脳の形態や構造、脳と生体リズムについて説明できる。 ・脳機能解析に用いられる各手法(fMRI, PET, SPECT, MEG, EEG, NIRS, MRS)の物理学的・生理学的原理、測定対象等の基礎的な内容、およびその応用について説明できる。 		
授業計画	<p>脳機能解析の基礎として、脳と生体リズムおよび脳の形態と構造についての授業を行ったのちに、各手法(fMRI, PET, SPECT, MEG, EEG, NIRS, MRS)の原理、基礎的内容、応用についての授業を行う。</p> <p>第1回 (安倍)introduction、生体リズム(サーカディアンリズム)と脳</p> <p>第2回 (佐藤、岡)脳の形態・構造</p> <p>第3回 (齋藤)fMRI の原理と実験デザイン</p> <p>第4回 (島田)fMRI の基礎と解析・応用</p> <p>第5回 (島田)fMRI の高度な解析と展望</p> <p>第6回 (岡本)fMRI: 定型発達、発達障害者の脳機能発達について</p> <p>第7回 (小坂)fMRI と精神科疾患</p> <p>第8回 (畑澤)PET の原理と解析・応用</p> <p>第9回 (北村)SPECT の原理と解析・応用</p> <p>第10回 (清野)PET、SPECT の分子プローブの基礎</p> <p>第11回 (岡沢)PET の臨床応用</p> <p>第12回 (下野)電気生理学的検査(MEG・EEG など)の原理と解析・応用</p> <p>第13回 (菊知)MEG・EEG の精神科疾患への応用と NIRS の基礎と応用</p> <p>第14回 (尾内)MRS の原理と解析・応用</p> <p>第15回 (平野)認知行動療法と脳画像</p>		

授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること

時間割コード	774011	開講区分	第1学期
曜日・時間	月曜日・5時限		
開講科目名	発達臨床心理学	定員	
開講科目名(英)	Developmental Clinical Psychology	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室	年次	1年
担当教員	酒井佐枝子、奥野裕子、山本知加、井村修、金澤忠博、野坂祐子、望月直人、唐津尚子、松本有貴(大阪校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	発達臨床心理学		
開講言語	日本語		
授業の目的	本講義は、発達心理学的な観点から子どもの心の発達を理解し、臨床心理学的な観点から援助・支援に際しての個人の内的世界を理解する枠組みを習得することを目的とする。なお、この科目は心理学以外の専門分野からの学生の導入科目として位置づけ、基礎知識の習得と総合的な視点を持った人材の育成を目指すものとする。		
学習目標	各理論や概念への理解を深め、研究対象者および臨床現場における事象に対してそれらの視点から分析し、実践に役立てるために必要な方策を論じることができる。		
授業計画	<p>オムニバス形式による本講義では、臨床実践の理解に有用とされる諸理論や臨床技法および現在の潮流を概説の上、適宜事例を提示しながら講義する。</p> <p>第1回 (酒井)発達と支援を考える 個人の発達、特に乳幼児期における発達への包括的理解を深める上でこれまで心理学で唱えられてきた諸理論を紹介し、総合的視点からケースをとらえる。</p> <p>第2回 (山本)子どもの心理アセスメント 心理検査場面における子どもの認知、言語、情緒、社会性などのアセスメント手法について、発達障害をもつ子どもを中心に具体的な事例を紹介しつつ概説する。</p> <p>第3回 (井村)障害児臨床と動作法 臨床動作法を用いた障害を持つ子どもたちの心身の活性化やコミュニケーションスキルの発達促進的援助などの実践について述べる。</p> <p>第4回 (松本)学校におけるメンタルヘルス/心理臨床の支援と課題 学校におけるメンタルヘルス支援の教育的な枠組みとして使われる SEL(Social Emotional Learning)を概観する。それと同時に展開される SFP(School Family Partnerships)より、日本の課題に対する解決策を模索したい。また、児童・生徒の「行動の変化を促す」取り組みについて教職経験に基づく考察、「学校におけるユニバーサル支援」の研究実践、学習障害に対するオーストラリアの取り組みに学べることを概説する。</p> <p>第5回 (金澤)発達障害児の特性に合わせた支援 発達障害の理解とその特性に合わせた支援について、理論的背景とともに概説する。</p> <p>第6回 (金澤)アタッチメントの発達と支援 情緒的安定や二次的障害の軽減に重要な役割を果たすアタッチメントの形成と障害並びに早期介入について概説する。</p> <p>第7回 (酒井)子ども虐待予防と再発防止に向けた支援1 子ども虐待の実態およびリスク要因を整理し、法整備の変遷および発生メカニズムを概説する。</p> <p>第8回 (酒井)子ども虐待予防と再発防止に向けた支援2 子ども虐待を関係性およびトラウマをキーワードに概説し、虐待が子どもに及ぼす影響を論じた上で、虐待を受けた子どもに必要な支援の枠組みを提示する。</p> <p>第9回 (酒井)社会的環境と子育て 地域社会が家庭機能を支援、時には補完しながら、協働して子どもを養育していくという社会的養護について概説する。</p>		

	<p>第10回 (酒井)親育ち 子育てにおける養育者の親としての育ちについて、心理的発達の変遷を概説し、子育て家庭への支援のあり方を考える。</p> <p>第11回 (奥野)発達障害をもつ子どもの親への支援 自閉症スペクトラム障害等の発達障害児を持つ親への支援、特にペアレントトレーニングについて、これまでの歴史的背景や理論を概説する。</p> <p>第12回 (唐津)家族療法の視点から -システムズアプローチのモノの見方を使って- システムズアプローチの観点から、子どもを取り巻く環境(主に『家族』)への関わりを通しての、子ども個人への援助について概説する。事例を使った説明で、イメージしてもらいたい。</p> <p>第13回 (野坂)性と社会性の発達 乳幼児期から思春期にかけての性の発達を概観し、人間関係上のさまざまな問題や支援のあり方について考える。</p> <p>第14回 (奥野)子ども期から大人期におけるこころの諸問題 子どものこころの問題、またその親や家族の精神医学的な問題への対応について学び、その症候と経過から支援の在り方を考える。</p> <p>第15回 (望月)青年期以降の発達障害を抱える方への支援 青年期以降の発達障害(傾向)を抱える方の日常生活における困難さや支援の実際について、概説する。特に大学生への修学支援や就労支援の具体的事例を紹介し、支援の在り方だけでなく、発達障害における『障害』とは何かを考える機会としたい。</p>
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・他の導入科目を履修することで総合的視点を養い、演習科目での実践的学習の基礎とし、高度専門科目での研究推進の基礎としたい。

時間割コード	774012	開講区分	第2学期
曜日・時間	火曜日・5時限		
開講科目名	小児発達評価・療育学	定員	
開講科目名(英)	Assessment of and Intervention to Developmental Disorders	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室、金沢校講義室、福井校講義室	年次	1年
担当教員	大井 学、平谷美智夫、荒木友希子、吉村優子(金沢校)、上田 功(大阪校)、清水 聡、藤岡徹、藤沢隆史(福井校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	小児発達評価・療育学		
開講言語	日本語		
授業の目的	発達障害のある子どもの心を理解し支援するためには、その複雑な性格にかんがみて多方面から、発達と障害を評価・支援する枠組みを習得する必要がある。本授業では、評価、診断、介入、療育にかかわる基礎的な知識から最新の知見までを学ぶ。		
学習目標	構音を含むコミュニケーションの評価法、医療の場での診断法、各種療育プログラムの手法を獲得する。		
授業計画	<p>(大井 学/4回) 言語行為、会話の含意、文脈の利用などにかかわる臨床語用論ならびにその背景基盤を構成する心の理論、中枢性統合、実行機能、支援方法としての臨床語用論的アプローチについて学ぶ。</p> <p>(吉村 優子/2回) 乳幼児期のコミュニケーションの発達過程を概説し、発達障害児の行動的特性の評価、介入などについて科学的知見に触れながら学ぶ。</p> <p>(平谷美智夫/1回) 自閉症スペクトラム障害(ASD)・学習障害(LD)・注意欠陥多動性障害(ADHD)、3疾患の相互関係と医療・療育支援について概説する。</p> <p>(清水 聡/1回) TEACCH プログラム、応用行動分析(ABA)、PECS、ソーシャル・ナラティブなど発達障害に対する主な療育・介入・支援の手法について概説する。</p> <p>(藤岡徹/1回) 臨床場面での例をあげながら、発達障害の評価・支援・配慮について概説する。</p> <p>(藤沢隆史/1回) 発達障害における環境的要因について概観し、生活習慣や家庭環境(家族関係・社会経済状況)、環境化学物質などの評価法について学ぶ。</p> <p>(荒木友希子/3回) 心理療法のひとつである認知行動療法を取り上げ、その基盤となる学習理論、および、基礎的知見の臨床的応用について学ぶ。</p> <p>(上田 功/2回) 幼児の構音発達に対して、言語学・音声学からのアプローチを紹介し、さらに機能性構音障害の分析方法を検討する。構音障害のメカニズムを適切に理解することによって、社会のなかの構音障害者について考える機会としたい。</p>		
	第1回 (大井)臨床語用論概説(言語行為)		
	第2回 (大井)臨床語用論概説(会話および文脈利用)		
	第3回 (大井)高機能 ASD にともなう語用障害概説		
	第4回 (大井)語用障害のメカニズム:背景基盤、創発、補償		
	第5回 (吉村)乳幼児の言語・社会性・コミュニケーションの発達		
	第6回 (吉村)発達障害における行動特性の評価・脳科学研究について		
	第7回 (平谷)発達障害児に見られる多彩な臨床症状とその支援		
	第8回 (清水)発達障害に対する主な療育・介入・支援の方法について		
	第9回 (藤岡)発達障害の評価・診断・介入・支援の概要について		

	第 10 回 (藤澤) 発達障害における環境的要因とその評価
	第 11 回 (荒木) 認知行動療法の特徴と基礎原理
	第 12 回 (荒木) レスポンデント条件づけの基礎と応用
	第 13 回 (荒木) オペラント条件づけの基礎と応用
	第 14 回 (上田) 幼児の構音発達のメカニズム
	第 15 回 (上田) 構音障害の音韻分析
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席回数が 2/3 以上に達した学生に対して、講義への参加・聴講態度や理解度・課題提出状況などを元に総合的に判断し、一定の基準に達した者に対して、2単位を認定する。
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	774013	開講区分	第1学期
曜日・時間	水曜日・6時限		
開講科目名	母子保健・教育福祉論	定員	
開講科目名(英)	Maternal and Child Health, Education and Welfare	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室、金沢校講義室、福井校講義室	年次	1年
担当教員	酒井規夫、山崎あけみ、服巻智子(大阪校)、河合隆平、熊崎博一(金沢校)、友田明美、川谷正男(福井校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	母子保健・教育福祉論		
開講言語	日本語		
授業の目的	子どものこころの健やかな成長を支える母子保健・福祉について、科学的な理解をはかると同時に、様々な障害や慢性疾患をもつ子どもの包括的な支援の考え方について、医療・看護・教育・福祉の理論と実践を基礎にしながら学ぶ。		
学習目標	子どものこころとからだの健康について、医療、看護、教育、福祉の面で理解することを目標とする。また、現代における問題点を知り、将来的な展望について考えることを目標に講義と自由発表を行う。		
授業計画	<p>(酒井規夫／2回) 子どもの権利にする歴史の変遷を通して、子どもの健康に関わる権利を守ることに於いて、医療、教育、福祉の果たす役割について概観し、現代における問題点として遺伝と教育の問題を取り上げる。</p> <p>(河合隆平／3回) 障害や発達困難のある場合を中心に、権利主体として子どもを捉えながら、教育と福祉分野における実践課題について整理する。発達・学習権保障をめぐる国際動向を概説し、現代の子どもの生活・発達危機と教育・福祉論の課題について言及する。</p> <p>(友田明美、川谷正男、熊崎博一／各1回) 母子保健領域を、小児科学、小児神経学、小児発達学の立場から縦横に論理を展開する。すなわち、小児科学では、子どものこころの問題について総論的な講義を行うとともに、親の支援にも触れる。小児神経学では発達障害の疫学、障害児を持つ兄弟への支援、ソーシャルサポート・パーソナリティ・認知パターンにも触れる。小児発達学では、虐待を通して社会における子どもの発育・発達の臨床的・社会医学的諸相について学習し、被養育体験と精神疾患や精神疾患発生に関する諸要因の相互関係、ライフステージ・ライフサイクル等にも触れる。</p> <p>(山崎あけみ／3回) さまざまな健康問題を抱えた子どもの育児について、小児看護・家族看護の立場から、理論・アセスメント・実践の実際について解説する。</p> <p>(服巻智子／3回) 自閉スペクトラム症のためのエビデンスベーストプラクティスとベストプラクティス(TEACCH, ABA, NBT, ESDM, PECS, CBT, TF-CBT, PCIT 他)について3回の講義で解説する。 (自由レポート発表) 最後の1回で受講者に自由にテーマを決めてもらい、発表と意見交換をします。各自の興味を持っているテーマで自由に発表してください。</p> <p>第1回 (酒井)子どもの権利～児童権利宣言から50年の歩みと医療の進歩</p> <p>第2回 (酒井)子どもと遺伝～遺伝に対する考え方と遺伝カウンセリング</p> <p>第3回 (友田)子育て支援の意義～虐待で傷つく脳～</p> <p>第4回 (熊崎)小児の精神神経疾患と親への支援</p> <p>第5回 (川谷)発達障害と障害児を持つ兄弟への支援</p> <p>第6回 (河合)インクルーシブ教育と特別支援教育改革</p> <p>第7回 (河合)子ども・子育て支援新制度と障害児福祉</p> <p>第8回 (河合)子どもの貧困からみた発達保障の課題</p>		

	第9回 (服巻)エビデンスベースプラクティスとベストプラクティスの定義と検証
	第10回 (服巻)発達期に応じたベストプラクティス(1)乳児～学齢期
	第11回 (服巻)発達期に応じたベストプラクティス(2)進学・就労・恋愛・結婚支援と問題行動の対処
	第12回 (山崎)子どもを取り巻く日本の家族 ―現状と課題―
	第13回 (山崎)子どもの病気と入院が家族に及ぼす影響
	第14回 (山崎)病児とともに生きる家族のアセスメントの支援の実際
	第15回 自由テーマ発表
授業外における学習	・E-Learning 教材(授業動画)視聴などで Web 学習システム(CLE)を活用するので、各自利用方法に習熟しておくこと。
教科書・参考書等	
成績評価	出席 40%、講義中の小課題への取り組み 30%、認定課題へのレポート 30%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること

時間割コード	774014	開講区分	第1学期
曜日・時間	水曜日・5時限		
開講科目名	認知行動療法学	定員	
開講科目名(英)	Cognitive Behavioral Therapy	単位数	2単位
場 所	千葉校講義室	年次	1年
担当教員	清水栄司、伊藤絵美、中川彰子、中里道子、浅野憲一、大島郁葉、杉山尚子(千葉校)	授業形態	講義(オムニバス方式)
講義題目	認知行動療法学		
開講言語	日本語		
授業の目的	<p>不安症(パニック症、社交不安症)、強迫症、うつ病、摂食障害(神経性大食症)、発達障害などの精神障害や睡眠問題に対する認知行動療法の理論的モデルを学習し、症状評価尺度を用い、概念化を行った上での実践方法を理解する。</p> <p>(清水栄司/3回) DSM-IV 診断の構造化面接 MINI、PHQ-9(うつ)、GAD-7(不安)による症状評価など、認知行動療法の適応を判断する方法を理解する。Clark DM,らによるパニック障害と社交不安障害の認知行動療法の理論を理解する。</p> <p>(伊藤絵美/2回) Beck AT の構築した認知モデルに基づくケース・フォーミュレーション(認知的概念化)の理論と方法を理解する。またケースとセッションの構造化、協同的実証主義、ソクラテス式質問法など認知療法に不可欠な原則とスキルを学び、うつ病に対する認知療法の適用の仕方を習得する。</p> <p>(中川彰子/2回) 行動療法入門では、行動療法の基本的な考え方、問題の捉え方について理解し、それがどのように臨床場面に応用されているかについて理解する。強迫性障害の行動療法では、行動療法でもっとも重要な行動分析(ケースフォーミュレーション)、典型的な症例に用いられる曝露反応妨害法の適応を中心に症例を呈示しながら説明する。</p> <p>(大島郁葉/3回) 自閉スペクトラム症を基盤に有する精神疾患(不安症、強迫症など)に対する、標準化された包括的な査定方法を理解する。その上で、自閉スペクトラム症を基盤に有する精神疾患を持つ患者に対し、認知行動療法モデルに基づく概念化や介入方法を習得する。</p> <p>(中里道子/2回) 過食症の症状維持に関与する体型や体重への特有のこだわり、感情、行動、生理機能の相互作用を認知行動モデルに基づき理解する。Fairburn CG の認知行動モデル、モーズレイモデル(Schmidt&Treasure,2006)について理解する。過食症の症状評価尺度(BITE)、認知行動療法の適応のアセスメント、Fairburn CG, モーズレイモデルに基づく認知行動療法の理論について理解する。</p> <p>(浅野憲一/2回) 睡眠問題に対する認知行動療法を紹介し、睡眠を改善するための睡眠衛生の知識と認知行動的対処を紹介する。また、コンパッション・フォーカスト・セラピーは認知行動療法の新しい形として近年注目を集めているものである。認知行動療法の発展形として紹介する。</p> <p>(杉山尚子/1回) B.F.スキナーの創始になる行動分析学は、個体の行動の原因を環境との相互作用(随伴性)の中に見出し、随伴性を変化させることで行動の変容をめざす科学である。本講義では、行動分析学的な行動観を身につけるために、随伴性で行動の原因を明らかにすることはどういうことか、基本的な随伴性にはどのようなものがあるかを理解することが目標となる。</p>		
学習目標	不安症(パニック症、社交不安症)、強迫症、うつ病、摂食障害(神経性大食症)、発達障害などの精神障害や睡眠問題に対する認知行動療法の理論モデルおよびその実践方法を他者に説明することが出来る。		
	第1回 (清水)認知行動療法のアウトカム・データベース構築のために		
	第2回 (伊藤)認知療法入門		

	第3回 (清水)不安症(パニック、社交不安)の認知行動療法1
	第4回 (伊藤)うつ病の認知療法
	第5回 (中里)過食症の認知行動療法1
	第6回 (中里)過食症の認知行動療法2
	第7回 (浅野)睡眠問題に対する認知行動療法
	第8回 (大島)自閉症スペクトラム症の認知行動療法1:アセスメントと心理教育
	第9回 (清水)不安症(パニック社交不安)の認知行動療法2
	第10回 (杉山)行動分析入門
	第11回 (浅野)コンパッション・フォーカスト・セラピー
	第12回 (中川)行動療法入門
	第13回 (中川)強迫性障害の認知行動療法
	第14回 (大島)自閉症スペクトラム症の認知行動療法 2:二次障害のケア
	第15回 (大島)自閉症スペクトラム症の認知行動療法 2:特性のケア
授業外における学習	事前に配布される授業スライドを用いて予習し、専門用語等の意味を理解していること。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50% 【欠席課題レポートの提出について】 担当教員より、期限の指定があった場合を除き、当該講義日から2週間以内に提出すること。
コメント	講義の順番は変更になることがありますので、ご了承ください。

